

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと「風」

第三〇号（二〇〇八年十一月）

風に吹かれて（ ） 白井啓治

『春の生命の土に埋めて秋の滅ぶ』

突然に虫の声が死んだ。柿の葉が斑に茜を点す。異常気象を自慢するかのように深まった秋の空に竜巻が起り、夜半に雷が吼える。でも確実に訪れた秋が滅び、雑木は間もなく容赦のない枝となる。

地球の平均気温が一〇度上がるのが、地軸が変わらぬ限り、地表の見かけの様相は変わるが、日本から四季のなくなることはない。だから四季の移ろいは日本人にとって生命を自覚する、所謂尺度といえる。

十月の最終日曜日のこと。この九月から百姓のまねごとをするために、瓦会で自給農園をやっている松山さんの所へ手伝いというか邪魔しに出かけているのであるが、その収穫祭がおこなわれた。

松山自給農園と契約をされている東京、千葉、埼玉などの方と劇団ことは座関係の人達と、定番のさつま芋掘りで土に遊ばれ大はしゃぎした掘り起こしたさつま芋を、今はもう行われなくなった根菜類の土に埋めての越冬保存を行った。腰を痛めた私は、ただ眺めるだけであったが、土に遊ばれて嬉々とした表情をみて、人間とは

土に戯れることの如何に必要なことなのかをしみじみと思わされた。特に大地を命の母と大切にしているオカリナ奏者・オカリナ製作者である野口さんの土に遊ぶ笑顔は実に屈託なく、喜びの唄そのものであった。

世界的金融恐慌の嵐が吹き荒れていて、通貨価値が上がるの下の下がるのと大騒ぎをしている。金融の不安定による恐慌事態は大変な問題なのであるが、金融恐慌の本当の恐ろしさは、明日食べるものがなくなることなのであるが、通貨価値の上がり下がりだとか金融の流れの停滞することだけにしか、目向いていない。給料が安くなることなどが、ボーナスが出ないなどといった表層にだけに目が奪われてしまっている。

通貨というのは物と一対で初めて機能するものなのだから、本当に困るのは物がなくなることなのだ。地球規模で見たとき、人間が食さなければならぬ物（食糧）が、圧倒的に不足しているのである。通貨なんか持っていても、買えるべき物が足りてないのだから、生きてはいけないのである。

金融恐慌を単なる金融の流れが止まる、鈍くなるという一方の面だけの問題として考えてはいけぬのだ。金融には常に物が一対となつてくついでいなければならぬものなのだけれど、多くの人はそれが見えていない。しっか

りとした経営者は、通貨には物が一対となつて繋がっていないければ、破綻することを知っている。それが理解できない経営者の会社はすぐに潰れる。国や市町村の経営も同じである。

市報が配られ、そこに市の財政健全度は基準内、と書かれてあった。国が決めた財政状況を指標で示したら健全度は基準内ということなのであるが、お金の貸借対照だけが健全であつてもそこに物が一対となつて存在しなければ暮らしては立たない。財（金）だけの貸借対照が健全でも意味がないのだ。よく考えると実に、恐ろしいことである。

中国産の輸入冷凍食品は：などしたり顔で話をしている場合ではない。ましてや管理、規制の強化で安全の確保なんてことを叫んでいるのはもつと恐ろしいことだ。

日当たりの向きによってキュウリは曲がるもの。曲がってないキュウリは不自然、とすぐに考えられる生きる力をも身につけないと、物のないお金の貸借対照だけでは本当に滅びてしまう。

『大地に人の命の十世に継がれてふるさと。十世の移ろいに洗われて継がるは物語。物語の継いで希望の標すは伝承。時代の移ろいに流されて伝承の一つ忘れて暮らしの一つ沈む…』

朗読舞の台本にこんな詩を書いて演じているのであるが、金の勘定に流されて物の造るを忘れて、暮らしのみんな沈む」となつてはあまりにも希望がない。

金の勘定をするときには必ず物の勘定も一緒に、と土に遊ばれながら喜びの笑顔を見せていた野口さんを思い出し、そう思ってしまった。

歴史ガイドに同行して(7) 兼平ちえこ

この街に来ると

少年の自分に会えるんです

少年の自分が駆けてくるんですよ

時々、この街に来てますよ

こんな素敵な表現をされて、こんな素敵な時を楽しまれている、水戸からいらして下さる団塊世代の男の方に出会ったのが中町通りでした。今回の「常陸国風土記を歩く会」の皆さんへのご案内は、そんな恋しい街、中町通りから清涼寺 金刀比羅神社 本浄寺をご紹介します。しょう。

清涼寺

所在地、国府六丁目一ノ三。宗派、曹洞宗。本尊、虚空蔵菩薩。元徳二年(一一三三〇)大掾高幹が尼寺が原に建立。国分尼寺の一大伽藍の一つであった。文明十二年(一四八〇)に現在地に移転。天正十八年(一五九〇)佐竹義宣に大掾氏は滅ぼされ、清涼寺も焼失。その後義宣の伯父南義尚によって文禄元年(一五九二)に再建された。山門に市中禅林の扁額が掲げられているが、ここは昔、地方僧侶が集合して修行する僧堂でもあった。現在の庫裡中庭には二基の茨城廃寺の礎石が伝わっている。平成十年には、代表作「鉄腕アトム」で知られる漫画家、故手塚治虫氏の先祖が江戸時代の府中藩(現在の石岡市)の藩医であったことが判明し、先祖の血筋を引く墓も現存していることが確認された。手塚治虫氏は、今年生誕八十周年を迎え、いろいろな記念イベントも行われています。

金刀比羅神社

鎮座地、国府六丁目一ノ一 祭神、大物主神

崇徳天皇。もとは香取神社、香取大権現堂などといわれ、現在、配祀となっている香取神社が発祥の社地。もともとは大掾家が軍神、守護神として、外城カンドリの地(当会報二七号に紹介)に香取神宮を勧請したことにはじまる。町の中央に鎮座し、海の守り神として銚子より平潟へかけて海浜の方々の崇敬による講中(神仏の信者のなかまの組合)などで賑わった。何回かの大火で焼失。昨年十月に現在の建物は再建。月の十日が祭り。十月十日大祭で出御する御輿は特に華麗。境内に妻恋稻荷神社(祭神、宇迦之魂命)うかのみたまのみこと、稲の豊作をつかさどる。産業の神)と淡島神社(祭神、少産名命)すくなびこなのみこと。婦人の病に効験があるといわれる)が祀られている。

ここであつと神社の紹介を一休みして、中町通りの昭和ロマンをご案内しましょう。中町通りには昭和四年の大火災後に建てられた登録文化財の建物が点在しています。登録文化財とは、築後五十年を経過し、歴史的景観に寄与し、地域で親しまれている珍しい形や優れたデザインを持つなど一定基準にあてはまる建造物で、活用しながら次の世代に伝えていくということを目指している制度です。道路に面している五軒の建物をご紹介します。

丁子屋(ちょうしや)

江戸時代末期に建てられた染物屋(現在は観光施設「まち蔵藍」)。木造二階建てで昭和四年の大火にも焼失を免れ、商家建築では現存する

唯一の建物。喫茶室もあり、丁寧な和のおもてなしに心洗われます。二階の見学もできます。

福島屋砂糖店

昭和六年に建てられた砂糖問屋。木造二階建ての商家建築。土蔵造りの壁が土壁漆喰塗りではなくコンクリートでできているのが大変珍しく、黒塗りの外壁が外観に重厚さを与えています。昔懐かしい砂糖を一般の人でも求めることができます。

久松商店

昭和五年ごろに建てられた化粧品、雑貨店。木造二階建ての看板建築(現在は喫茶店)ドイソ下見板張りの正面外壁は、銅板が貼られている。この銅板は、戦時中に供出された。その事実を示すものとして東条英機からの感謝状が今も残されている。現在の外壁銅板は三年前くらいに張り直されたものである。残念ながら、只今、喫茶店はお休み中で、再開を願う声が多い。

十七屋商店

昭和五年に建てられた履物屋。木造二階建ての看板建築。二階は持送風の柱頭飾りを中心にして縦長の連窓を左右に配する。昭和四年の大火後この地で最初に再建され、この地区における看板建築の先駆けとなった。現在も昔のお話をたづねると聞かせる看板おばちゃんの優しい笑顔がお迎えしてくれます。

すがや化粧品店

昭和五年頃に建てられた雑貨店(現在は化粧品店)で、木造二階建ての看板建築。屋号を冠したペディメント、コリント・イオニア様式風の柱頭飾りなどの重厚な外観でこの地区における看板建築の秀逸なものひとつです。重厚な

外観と清楚な化粧品品の構えとがマッチして上品さが感じられます。

きそば東京庵

昭和七年頃に建てられた蕎麦屋。木造二階建ての和風食堂建築。戦後座敷部分を取り払い、土間にテーブルと椅子を置いて客用の空間とした。数寄屋風の洒落た意匠は、この地域では珍しい。蕎麦通の常連の方が多いと聞きます。お酒落な佇まいと美味しいお蕎麦をお楽しみください。

森戸文四郎商店

昭和五年頃に建てられた飼料店（現在は生花店）で木造二階建ての看板建築。柱のレリーフ、縦長の窓、褐色タイルなど全体にアールデコ調の外観は正面を洋風の意匠で飾る看板建築の好例である。思いつ人への贈り物にお花をどうぞ。

以上が中町通りに面した昭和レトロな登録文化財のご案内でした。

さて、森戸商店さんへ前進、信号のある履物店より神社通り（市民会館へ）に入り、間もなくの十字路を右へ約二十メートル。

本浄寺

所在地、府中二丁目四ノ三九。宗派、浄土真宗、東本願寺大谷派。本尊、阿弥陀如来。寺の創建は、天平宝字年間（七五七～七六四）で開基者は順誓法橋という人で、場所は尼寺ヶ原。建歴二年（一一二二）に親鸞上人が常陸国に衆生化益のために布教、鹿島神宮に数回参籠の途中、この寺に立ち寄っている。

その時の住職、信円法眼は、親鸞の年仏門に帰依し、真言宗を浄土真宗に改宗。天正八年（一

五八〇）、火災の為焼失。慶長十七年（一六一一）甲田三郎兵衛藤原宗旭という人が尼寺ヶ原の地より現在の地に再建。

以上、今回は、登録文化財を加えてのご紹介となりました。

参考資料 石岡市史（上）

天保三年、弘化二年、明治三年と三度焼失。明治十一年三月に造営を行い、大正六年の暴風雨の為大破。大正七年に古寺を購入、改築した。本堂は珍しい「おがみ鬼形式」の屋根である。寺宝は親鸞上人直筆の「袈裟掛名号」。

断崖に連なる 赤、青、黄
攀じ登つても
よじのぼつても
絶壁

ちえこ（八ヶ岳にて）

ふるさと風の文庫

11月新刊

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の歴史エッセイ

「ふるさと風にたずねて」(・) (二冊組：1000円)

菅原茂美待望の第一作 「遙かなる旅路」(1) (定価：500円)

打田昇三：ふるさと「風にたずねて」(・ / ・) (二冊組：1000円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文集大成！！

ふるさと「風のことば」 (定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を呟いたエッセイ集

兼平ちえこ 「風邪に押されて」 (定価500円)

小林 幸枝 「風に舞う」 (定価500円)

白井 啓治「移ろう風の中に」 (二冊組：800円)

近藤治平「風に吹かれて」 (二冊組：800円)

ふるさと風の文庫は、

・ギター文化館：0299-46-2457

・いしおか補聴器：0299-24-3881

にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局

石岡市石岡 13979-2 (白井方)

電話 0299-24-2063

『運』という言葉は、なんだか、分かったよつで、分からない。雲を掴むような、もやもやした感じの言葉だ。

自分の意思に関係なく、なんかしら巡り合わせでやってくる吉凶。人智の及ばない成り行き。人生の大部分は、良しにつけ、悪しにつけ、自分ではどうにもならない、天によって定められた宿命のような部分も多い。

その『運』とやらが、特にこれといった努力をしたというわけでもないのに、なんとはなしに、自分にとつて良い方に向いているのなら、誠にラッキー。しかし懸命に努力したにも拘わらず、やることなすこと、悉く、裏目に出ることもある。良いこと、悪いことが、半々なら、まあ、それでよしとする他あるまい。

芥川龍之介は、人は才能や努力だけではなく、巡り合わせた『運』も、非常に重要な要素だと言っている。そこで『運』とは何か? 私なりに検討・分析してみたい。

そもそも自分が、今ここにこうしていられるわけは、一体どうしてなのだろう? ……どういった必然性があったのだろう? ……同じような環境で育ったのに、兄弟姉妹で、大きな開きがあるのは、どうしてだろうか? ……などなど。

私はバカと言われてもしようがないが、物事すべて、宇宙創生まで遡らなければスタートできない。物事の根本はなにか? ……それが分からなければ、そこから前に進めない。誠に困った性分である。理由は、例えば『人間とは何か?』というテーマにしても、所詮、人間といえども、

「原子・分子の離合集散により生命活動を営む物質の塊」という概念しか持てない。唯心論者には到底受け入れられない考えであろう。しかし、いくら高度の知能といえども、脳細胞の生化学反応の結果であり、電気反応の停止は即、「死」を意味する。大脳の活発な生化学的反応からのみ、高尚な思想も芸術も生まれる。いかなる、聖人君子といえども、微量のホルモン物質によって、喜怒哀楽を支配される。誰でも、樹木が放散する化学物質フィトンチットにより、森林セラピーが得られ、リラククスできる。

故に、現在自分がここに「在る」と言うことは、自分の肉体を構成する元素が、どこにあつたかに左右される。一三七億年前のビッグバンのあと、宇宙が冷え込んでガスと塵の円盤星雲から銀河ができ、我が天の川銀河には一千億個の恒星が生まれた。ある空間の物質は、その中心星に大部分が吸い寄せられ、五〇億年前、その火球が凝縮して、我が太陽が生まれた。他の、振り回されて空間に漂う物質は、小さな塊同士が衝突合体し、太陽からの一定距離を置いて、順番に原始惑星へと成長していく。比較的重い元素は、恒星(太陽)に近いところで塊となり、密度の大きい惑星となる。九十二種類の元素人工的な超ウラン元素二十六種を除く)が集まって、四十六億年前、地球が生まれた。四十五億年前には、火星程度の小惑星が、地球に衝突してきて、砕け散った破片が、地球の公転軌道に投げ飛ばされ、それが集まって衛星「月」が生まれた。

一方軽い元素は、太陽から遠いところでガス球となり、木星や土星などとなる。我が太陽系

では、こうして惑星が8個誕生。その他、微惑星・小惑星・彗星・隕石など、数え切れないほどの星々が生まれた。

【今から六五〇〇万年前、中米ユカタン半島に、直径一〇kmの小惑星が衝突し、恐竜が絶滅した。この小惑星は、重元素でできている火星と、軽い元素でできている木星との中間に、惑星になりきれなかった無数の、小天体(最大は直径九五二kmの「ケレス」から微粒子まで。現在、登録数・二一九四三六個)の帯(雪境界線)があるが、そこから、なんらかの引力バランスが崩れ、跳ね飛ばされて地球にやってきた。

同様、月のクレーターも、無数の小天体が、飛び込んでできてきたものだが、地球にも多くの小天体が飛んできていた。微粒子は流れ星として地上到着前に燃え尽きるが、時々隕石として大きな塊が落下してくることもある。ただし、地球には大気・水等の浸食や、火山灰の堆積などがあるため、クレーターは明確な形としては残りにくい。しかし、科学者は確率を計算し、全生物の九〇%以上も絶滅するような小惑星などの衝突は、確実にやって来るといふ。

このように地球を構成した重元素が、たまたまその軌道周辺に集中し、地球という惑星にまで成長したのは全くの偶然。いろいろなラッキーが重なり、この地球上に生命が誕生したのも偶然。微生物 多細胞生物 脊椎動物 魚類 両生類 爬虫類 哺乳類へと順調に進化を遂げたのも、全く偶然。(進化の原動力は、食べ物・天敵・温度などの他、小天体の衝突や火山噴火により、煤煙が太陽光線の地上到達を妨げる植物の光合成低下 空気中の酸素濃度が低下

効率的に酸素を取り入れるため、体を変換して対応……といわれる)そして小惑星が跳ね飛ばされたのも偶然。それが地球に届いたのも偶然。落ちた場所も偶然。その時の生物種も偶然。

恐竜の絶滅がなければ、哺乳類の繁栄もなかった。人類の誕生もなかった。

そして、地球を構成する元素が、今、地球上に存在するものでなかったら、たとえ生命が誕生したにしても、どんな姿・形をしていたであろうか。SF小説にでてくる「きてれつ」な姿だったかも……。故に今ある姿が、ベストかどうかは分からないが、我々がそれを美しいと考えるのならば、ラッキーと言つことであろう。

なにもかにも、偶然の積み重ねの結果が、今日の姿と考え、これで良かったと考えるならば、ハッピーエンドの物語という事になる。】

さて太陽系は、内側から、水星・金星・地球・火星までは重い元素で固まった惑星であり、その外を廻る木星・土星などはガス球である。

人類はその第三惑星である地球に誕生した。地球は重い質量を持つ中心核・マグマ・地殻表面には、堅い地殻があり、その上に、水や空気がある。地球の平均気温は十五度であるが、お隣の、金星の地表温度は四七〇度であり、火星はマイナス六〇度である。人間の肉体を構成している元素は、偶然この地球に存在した元素で作りに上げられている。元素の種類・濃度などが違えば、どんな生物になっていたか分からない。

以上長々と述べた理由は、『自分が今ここにいる』と言う意味は、すべて「偶然」の積み重ねの集大成だったと言つこと。地球が生まれ、生

命が生まれ、哺乳類が繁栄する下地ができ…無限に偶然が重なった結果が、幸運だったと言つ事。宇宙に霧散した物質が、太陽との距離で、どの辺に位置したか、どこで、なにが塊になつたか、それが偶然にも地球という位置であり、水が三態(固体・液体・気体)をなし、生命が誕生する条件がみごとに整つた。ちよつとでも太陽に近かつたり、遠かつたりしたら、おそらく生命の誕生はなかった。(我が天の川銀河には、知的生命が存在しうる惑星は、一〇〇万個ぐらゐはある筈と計算されている)。

今、自分がここにいるということを『幸運』と考えるなら、以上長々と述べたような「数えきれないほどの偶然の積み重ねで、即ち『運』が、大方良い方に向いてくれたから、現在の自分がある」と解釈すべきであろう。

そして究極のラッキーは、アフリカで、今から20万年前、ホモ・エレクトウス原人が、いかなる強烈な環境変化を受けたのか、いかなる必然性が有つたのか知らないが、遺伝子を変換して、新人(我々現世人類「ホモ・サピエンス」)を生み出したことである。これぞ正に天佑神助と言つべきであろう。この新人は、大脳容積を一気に拡大し、非常に好奇心が強く、今から7万年ほど前、生まれ故郷アフリカを飛び出して、地球上、至る所へ拡散していった。今では何とその数、六十五億人にまで拡大した。そして、良いことか悪いことか知らないが、今やこの地球さえも跡にして、宇宙にまで、飛び立とうとしている。杞憂に過ぎないかも知れないが、まだ巢立ちには、早すぎる子雀が、親の許可も得ず、巣を飛び立ち、みすみす命を落とす「愚

とならなければよいのだが……。

【この頃私の耳が聞こえ過ぎて困る。天空で、移住地を探す宇宙人達の囁きが聞こえる。しかもこの頃の宇宙人は、どういふわけか茨城弁だ。『だめだっぺよこの星は。空気も水も汚れ、至る所ゴミだらけ。地雷なども、かなり埋まっている。ビルとか、蟻塚みたいな物が集中して、相当熱を持っている。殆ど病気だ。この星は。反重力・反物質・ブラックホール・超光速の科学は殆ど進んでいない。智慧ある生物は、育たなかつたんだな、きつと。危険なオモチャを振り回すヒトとかいう猛獣もいっぱいだ。ざつと数えても六十億は越えっぺ。それに、ヒトが運転してるのに、「自動車」だとき。笑わせっぺ……。ムカデみたいな長い乗り物、蛾みたいな空飛ぶ乗り物。文明の極限に達したような、のぼせっぷり。過剰繁殖したヒト種は、縄張り争いで、ドン・パチのケンカばかり。おまけに全人類を、何百回も殺せる数の「核兵器」とやらを、たいしたつもりで国々が、競争で隠し持つてる。みんなゴジヤッペ……。だめだーだめだーどっか、別の星を探すべよ!さあ、帰っぺ、帰っぺ!』】さて以上述べたことは、人類全体に関することであるが、それでは、「自分自身」は一体どんな必然性があつて、今ここに『在る』のか。一体、父と母には、巡り会うべき必然性など有つたのであろうか?…。大方の結婚なんて、なんとなく、その時の成り行きで…….というものが、一般的ではなからうか。親ではなく、私自身が全くそうであつたからそう考えるのか。この時代に、この日本で、この両親のもとに、この自分があるのも、これ正に偶然。それが幸か

不幸かは、各自の、もの考え方左右されるであろう。上を見たらキリがないし、世界の、半数近い人口は、飢餓にあえいでいる。それを考えたら、この時代にこの場所に生まれたことを、感謝するほかあるまい。

まかり間違えば、高い乳幼児死亡率で、飢餓に苦しみ、ろくな学校もなく、恐ろしい伝染病や毒虫・毒蛇など身近に満ちあふれている。しかも治安は極めて悪い。(私はそつという場所で、国際協力のため、しばらく働いていた) そんな場所に生まれていたら、今の自分など、生きていたかどうか分からない。不平など、言ってる場合ではなからう。全て偶然の賜だ。

卑近な例で恐縮だが、何かと言えば、先進地視察などと、公費を使い、外国の物まねをしにでかける。たまにはそれも良かるうが、帰りに必ず発展途上国にも立ち寄って、世界の現実を、しっかりと自分の目で確かめるべきだ。同じ人間でありながら、このように苦しい生活をしている人々が、こんなに沢山いることをしっかりと認識すべきだ。そつすれば、先進国だけが、贅沢や浪費を欲しいままにして良いわけがないことをはつきり認識できるだろう。そして我々は、なにもかも行政に負んぶに抱っこではなく、地域の力を結集して、必要なことは、自助努力で解決すべきことを、しっかりと心に刻むべきだ。危険な場所に「危険」の表示がなく、柵や囲いがなかったのは、行政の手落ち……などとする判決は、大方は本末転倒だ。危険なところは、どうやって避けるか、そんなことは当然、親が子供の時からしっかりと教育しておくべき事。賤の第一歩であり、子育ての基本であろう。自己

責任を回避し、なんでも人頼みにしたり、他人の所為(せい)にしたりするなど、民主主義のイロハも分かっていない証拠。

中米のある国の高速道路は、熱帯のスコールで、いくら修理しても穴だらけ。すると彼らはこう言う。『穴に落っこちて死ぬ奴はバカ……』これで済まされる。即ち、自分の命は、自分で守れ……と言うこと。豊かになると人は自立心を失い、親離れをせず、心根まで腐って腑抜けた「甘っちょろ」になる。

さて今度は、兄弟姉妹と、自分との比較。結論から言えば、これも偶然のなせる技。同じ親から生まれても、一卵性双生児でなければ、遺伝子の組み合わせは、大きく異なる。一卵性でも、育った環境が変われば、結果は異なる。

米国で、華々しく旗揚げしたベンチャービジネスが、わずか二年で店仕舞いした例がある。それは、三毛猫の体細胞からクローン子猫(遺伝子が一〇〇%親と同じ)をつくり、親が亡くなったとき、そっくりさんが、代わりを努めた。依頼主は喜び、五万ドルも払った。味を占め、これを犬にも拡大。最初はうまくいったが、数を重ねる中に親そっくりの子供ができなくなった。理由は犬や猫の毛色を決める遺伝子は一〇〇もあり、発生過程で、どの遺伝子が先に発動するかは全くの偶然であり、順番が違えば全く違う毛色のデザインとなる事が分かった。親そっくりでなければ客は納得しない……と言うわけ。この話からも分かる通り、クローンでさえも親そっくりではない。まして両親が半分ずつ遺伝子を持ち寄って、できた子供は、ある染色体では、母方の遺伝子が優勢で、父方は押さえ

込まれる。又はその逆など、受精・発生過程では偶然の積み重ねで、千差万別。体は父似だが、頭は母似、或いははその逆など当然兄弟姉妹に差ができるのは当たり前のこと。それ故自分どの程度の人物になれるかは、親・祖父母・曾祖父母……とキリがないから、五代ほど遡って、先祖三十五人を足して三十二で割る。それが自分「ぐらいいに思っていたら良いと私は考えている。

なにもかも偶然に支配される『運』で、自分の一生が決められては、かなわんが、何万年も続いた先祖からの遺伝子は、どうしようもない。しかし、生活する「環境」ぐらいいは、自分の意思で、ある程度選択したいものだ。そして、自分が将来なりたいと思う姿を、はつきりと胸に刻み、懸命に努力を重ね、人生の終末は、穏やかに、笑顔で過ごしたいものだ。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で...、大好きな雑木林に一掴みの土を分けていただき、自分の風をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465

0299-55-4411

心を覗いた

伊東弓子

秋がやってきたのはつい先達でだった。今日、作道を歩いていたら、

「今年もそろそろ生り物も終わりだね」

と話しかけてくれた人がいた。秋が過ぎていこうとしている様子に驚いている。早いこと。三年前の秋のことを思い出した。栗に纏わって、とても気になることが多く、そこに面白味も加わって、エッセイを書いてみたことがあった。

峯り取る梨や柿と違って栗は独りで飛び出していく。拾われるのを待っているかのように思うと、小さな実を巡って人の様子が微妙に変わるのを感じた。心の動きが表情や行動に表れるから面白いと思った。

私が見たものを賢い鳥が感じたようにして綴ってみたり、人の様子を眺めて半分は悔いる気持で書いたりしたが、後で軽率だったと思った。自分の物差しで人の行動を見つめていたが、結局は自分の心の動きを他人の行動に置き換えていたに過ぎなかった。今年には自分の気持ちや行動がどうなるか気になる秋だ。

少しぐらい遠くであっても、自転車で出かけるのが常の私であるが、

「生り物の多い季節には畑道は走るなよ。誤解されるものになるからな」

と夫は忠告する。

「私は人のものを盗んだりしませんから、どう見られようと平気です」

と聞こえないくらいのことを書いて出かける。走りやすい舗装道路よりも山道の方がず

つと心地がいい。だから栗とも巡り合うことが多いことになる。

山道で山栗との出会いは一番安心して拾えた。自然の恵みを素直に、いただく「気持ちになる」。

篠が生い茂り栽培している栗か山栗か判別つかない場合は、拾うのに抵抗がある。そういう場所でも何人かで歩いている時は、悪びれることもなく手が出る。みんなで拾えば怖くない、の心理になってしまう。いつの間にかそう変身してしまう自分に気づき、怖くなる。

道路の方まで転がっている栗との出会いは一寸手が出ない。これは耕作しているものだからという気が働くからだ。ところが通る車が踏みつぶしていくのには腹が立つ。本来食べる物が無関心に惜しげもなく破壊される。それを見ていると食べてやった方がいいんだ、という解釈のもとに手が出てしまう。

「もらいます」

「いただきます」

という言葉と一緒に拾ってしまうのだ。しかし、歩道に落ちている栗と出会った時は、見ぬふりをして通り過ぎる。去年だったか下校時の小学生の会話を思い出すからだ。大人として恥じないようにと姿勢を正している自分に気がつく。

畑道は耕作者の栗の木がよく育っていて大粒の実はおいしそうだ。私の欲望を迷わすかのように枝が揺れる。時に身の落ちる音もする。

「これは人が作っている栗だ。拾うと盗むことになる。逃げ急げ」

と逃げるように走り去る。

上り坂で自転車を押している時の栗との出会

いはあまり苦を感じないで少し屈んで拾った。偶車があると忌々しいと思ったが、足で蹴っているのに気がついた。そうだ三年前の和服姿の女が私と会った時、罰悪そうにぞうりで蹴ったのを思い出した。同じ心境だったろう。

下り坂では栗との出会いはあっても目に入れずただ走るのみ。一つ二つの栗など気にするよりも先を急ごうという気持ちだった。

自転車の籠に多少栗が溜まってくると見目が悪いので手提げを乗せてみたりした。隠すことだ。あの日、山道で合った外人がふつとビニール袋を後ろに回して隠した仕草と変わりない私の姿だった。

この秋は栗を通して自分の心の中をよくのぞいたように思う。栗の他に、いろいろの生り物にも感じるものがあった。ボランティアの畑に実った無花果、ミニトマト、キウイ等は仲間と食べた。葡萄、梨、柿、林檎、蜜柑などは店先でもとめた。薄紫の皮の通草や寶石のような石榴は頼んでもとめて子供たちに見せてやった。

結局、いろいろな形で求めて自分の物にしてきたのだと思う。すべての物本来は自分の子孫のために存在している筈なのに、鳥や動物も一部を頂戴して生きている。中でも人間はありとあらゆるものを頂戴しながら、美味い不味いと口にする。私もあゝだ、こゝだと理屈をつけながら栗との出会いをした秋だった。

婆さんは欲張り者と表現されることが多い。私も欲張り婆さんになってきつつあることを感じるこの頃だが、おいしく見えた大きい栗よりも、小さい山栗のおいしさを知ったのは、この秋の収穫だった。そして、栗とかがわっていく

中で、心の動きは湧いて出てくるものだから、その心の動きを行いで表す、そこに自分があることを自覚した秋だった。

「ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会。入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平 ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

才媛の時代(二)

打田昇三

スペインでフランコ将軍が独裁的な軍政を敷いていた時代に「公園でフランコに乗った」と友人に話をした市民が「国家元首侮辱罪」で投獄されたという。風刺的な笑い話らしいが、権力者は自分の名が出ることに神経を尖らせるものである。

世界的な名作であることは分かるのだが、源平盛衰記や平家物語などと違って、登場人物の動作が鈍そうな源氏物語には興味はあるが読書欲が湧かない。しかし文学作品でも宮廷生活暴露本のような源氏物語に、実在の天皇の名が二人(朱雀帝と冷泉帝)も出てくることを良く許したものだと思議でならなかった。

源氏物語の主人公「光源氏」のモデルは、藤原道長とするほかに各説が有るようだが「前々太平記」では合成した人物に菅原道真の敵とも言える「源光(みなもとのひかる)」の名を借りたと推定している。光孝天皇の異母弟である。

実在の朱雀(すざく)天皇は即位したのが八歳である。その頃は藤原時平の讒言で九州へ流された菅原道真が憤死して、怨念の祟りとされる天変地異が都を中心に起こっていたから、人々の恐怖心も半端ではない。この天皇は常に母親(皇后)に抱かれて過こしたと伝えられる。

道真公の仇・藤原時平は母親の兄だから、祟りは天皇にも良く効いた。そして石岡にも関りのある「平将門事件」が起きたのもこの時代である。朱雀帝の時代は争乱の続く異常な世の中だった。

もう一人の冷泉(れいぜい)天皇は、幼時か

ら「精神の安定を欠く」言い方を変えれば「頭のおかしい人物」でこれも怨霊の所為にされていた。

村上天皇の第二皇子だったから無理して天皇にならなければ「変な人」と言われても平穩に暮らせたのだが、藤原一族の権力争いにより異母兄を越えて即位させられたため、落選した第一皇子の祖父が怨霊として付録に付いてきたのである。

紫式部も「普通ではない」天皇を選んで登場させたし、治世年代が違つから偶然の一致だと言いつても出来よう。何よりも「源氏物語」は宮中の高貴で暇な女性たちを讀者に想定していたから、何の被害も無い藤原氏が許可したのだと思う。

憎い敵や邪魔な奴を呪って災禍を齎す…陰険で不条理で非科学的だが一定の効果はあつたらしくこの方法は王朝時代に頻繁に使われている。寛弘六年(1009)の一月三十日、紫式部も伊勢大輔も、元旦から始まった新年諸行事にウンザリしながら嫌な顔も出来ずに神妙な態度でテキパキと仕事をこなしており、お節料理をじっくりと味わう暇も無かった。

「式部様、お呼び出しにございます…」

殿舎に明りが灯される頃、薄闇の中から現れた女官が式部の部屋の前で慌しく手をついた。今は暗くなれば誰かがスイッチを押せば明るくなる。平安時代の宮中では、灯り一つを点すにも形式があつて、まず主殿司(このものつかさ)という役所の女子職員が近代オリンピックの聖火リレーを真似て種火を持つてくる。

この係員は煤けた顔でも良さそうなものだが、

高貴な人にも会う可能性が高いため、容姿端麗な美女が選ばれたよつで、清少納言も「枕草子」に「羨ましい」と書いているそつである。

「急ぎ、一の上様の許にお出でくださるよつにこのことにて、お使いの方は玄関先からお帰りになられたそつにございます」

取次の女官の言葉から火急の用事であることは推測できるが、心当たりは全く無かつた。

「わかりました。御苦労でした」

式部はあっさり答えたけれども、周りに仕える女官たちは、これから式部が外出するとなれば相応の支度があるのでソワソワしている。

「私一人で直ぐ参るゆえ供は要らぬ…伊勢大輔殿をお呼びするよつに…」

呼ばれた大輔が心配顔で来た時には、既に服装を正した式部は出かけるばかりであつた。

「これから御前へ参ります…中宮様にはお話しせずに向かいますが、私の他出は伏せておいてください…後は宜しく…」

手職を用意させて、式部は一人で後宮を出た。藤原道長の起居する殿舎は近くに在り程なく到着したが、玄関先には篝火が焚かれて大勢の家臣が警護しており、使いに来た道長の近侍が待ち受けていて奥へ案内した。途中の要所に控えている髭面の武者たちが式部に対し神妙に頭を下げた。

「？…只ならぬ様子に式部は緊張していた。

「紫式部様、お見えにござりまする」

廊下から近侍の者が声をかける。

「うむ…入られよ、気のせいか声が固い。

「お召により参上しました」

「式部殿、これを見られよ…」

挨拶ももどかしげに、厳しい顔で道長が式部に手渡したのは一枚の汚れた紙である。

「ご無礼を致します…」

式部は、受け取った紙を灯りに近づけてみた。何やら謎めいた文字がちりばめられており紙面の中頃に数人の名が書かれている。

「これは！」式部の驚く声に、道長が厳しい眼を向け言葉を被せて言った。

「…そつじや！中宮と親王とを呪詛するための厭符（えんぷ、呪い札）よ…これが御座所の縁の下に埋められていたという…ついでのようにこの道長の名も載つておるよつだが…畏れ多くも中宮と親王を傷つけんとする所業は許せぬ…」

「誰の仕業でございましょうか？」

式部は無理とは思つたが、一番に気になる質問をしてみた。「分らぬ…」という返事を想定していた式部に、思わぬ答えが返つてきた。

「今、検非違使（けびいし、官憲）たちに命じて探索させておるところだが…どうも為理（ためたか）の家に怪しい僧が入りしている、との噂がある…それが事実だとすれば、高階の誰かが関わりを持つていることも推測されるのだが…ともかく事件は厳しく詮議致すとして、式部殿にお願ひしたいのは何よりも中宮と親王に不安を与えることの無いよつに、また、身辺に變事が生じないよつに充分に注意をして頂きたいのじや。もとより御所近辺の警備は厳しく致させるが式部殿は、それとなく周りに目を配り、努めて中宮と親王のお傍を離れないよつにして頂きたい…くれくれもお願ひを申す…」

道長は式部に懇願するような眼を向け、軽く

頭を下げた。それが何事も強引な野心家に似合わないよつに感じて、式部は慌てて一礼した。

「委細承知仕りましてございます。直ぐに立ち戻り中宮様、親王様の御許に参上致します…」

家臣に送らせよう、という道長の配慮を辞退して式部は足早に後宮へ戻つた。既に道長の命令で増やされた武者が、身を隠すよつにして周辺を警護している。厭符の出た場所が後宮ならば、当然のことだが、それならば直ぐに騒ぎになる筈なのに…いささかの疑念も有るが式部は打ち消した。

時と共に警備は嚴重になり、戻る式部も職務質問を受けが

「紫式部、道長様のお許から下がる…」

と答えれば、武者達は慌てて謝つた。

式部が後宮へ戻ると、伊勢大輔が心配そつに出迎えた。あらましの話しをすると、大輔も驚いた様子だつたが、それは事件そのものよりも、大晦日の夜に式部が告げたことが現実となつた…その予想というか昨今の地震予知より正確に何かを予感していた紫式部に驚いたのである。

式部は大輔に協力を頼み、二人は道長に指示されたよつにさり気なく後宮の内部に目を配り中宮の傍を離れないよつにした。彰子中宮の後宮入りに際して、道長が付けた女房だけでも四十人と考証されている。大勢の女房や付き人や女官の中にも何らかの關係で犯人グループと縁の有る者が居ないとは限らない。

「式部、何か有つたのですか？」

頻繁に顔を見せては辺りをキョロキョロと見回している式部と大輔の行動に不自然なものを感じとつたのか彰子中宮が訊ねた。

「いえ、何もございませぬが、近頃、鼠が増えて困る！と膳司（かしわでのつかさ 厨房）の者が申しておりますので…」

苦し紛れの式部の答は、天井の鼠を怒らせた。ゆっくりと眠ることの出来ない夜が続く昼間でも朦朧としかけた二月四日になると、道長から使いが来て、検非違使の捜査により怪しいと睨まれた僧が捕まり、その自由から「犯人」と指定されたグループの検拳が式部に知らされた。

全ては状況証拠であるが、天井の鼠と同じで当人たちは濡れ衣でも否定することが出来ないからこれにて一件落着となる。

最初に捕まった坊さんは、藤原道長が紫式部の質問に答えたように、「…為理の家に出入りしていた…」という理由だけで「怪しい！」と決めつけられたのだが、円能という法名を持つ、光孝天皇系源氏お抱えの立派な僧侶であった。

円能の主は名を源為文という。為理とは別系ながら光孝源氏であり、為理の弟が為文の娘を妻にしていたから縁戚でもある。さらに、為文の妻は定子皇后の叔母であり高階貴子の妹になる。道長に反感を抱いても不思議ではないのだが、果たしてこの時期に「呪詛」などという手段で抵抗運動をするものであろうか。

この事件は「小右記」に記録があるとされるのだが、石岡市立図書館で調べて貰ったところ県内には蔵書が無いらしい。あまり知られていない事件で、私は昭和四十年代の短い期間に出て廃刊になった国文学の雑誌に、当時の平安博物館長をされていた角田文衛先生が掲載しておられた高階家の記事で内容を知った。

罪に問われた藤原伊周は、この時期すでに赦

されていたのに「呪詛への関与」を疑われ官位を剥奪されたが、半年経たずに復権している。前号で触れた「儀同三司」である。

私は藤原道長が第一皇子・敦康親王（定子皇后の子）を皇位継承から遠ざけ、自分の孫を天皇にするための策略で仕組んだ事件だと思っている。

怪しいと言われた坊さんが「呪いのお札」を書いた報酬として受け取った品物まで正確に記録されているというのは出来過ぎである。ともかく、この事件で藤原伊周の周り、つまりは敦康親王を庇護する高階一族やその縁に繋がる勢力は綺麗に粛清されたから道長の前途は明るくなった。日本の歴史は「呪い札」一枚で変わってしまった。

興味のあることだが、この事件の首謀者であり呪い札を御所の床下に埋めた実行犯は「光子」という女性だとされている。高階貴子の妹で清少納言の親友だったと考証されているから、事件が無ければ後世に文化的な名を残したかも知れない。

真つ先に逮捕状が出て、全国に指名手配されたが見事に行方を晦まして逃げ延びた。

「お気の毒ですが…どうにも致し方の無いことなのでしょね…」

事件が収まった後で、紫式部は中宮の許を訪れた道長から丁寧に礼を言われたのだが、二人きりの時に、褒められたにしては浮かない顔で式部が大輔に言ったのである。

「伊周様と明順（あきのぶ）様のことですね… 厳しいお沙汰でしたが…お二人は本当に関わりを持たれたのでしょうか？」

「大輔殿は、姉君がご苦労をなさった長徳一年の事件をあらかたはご存じでしょう…」

「はい…事情は分からなくても母親たちや姉の様子から、子供心にも何か大変なことが起こったことは感じて居りましたので…」

「あの時は初めの事件も重大でしたが、東三条院様（一条天皇の生母）が急に体調を崩されて、それが伊周様や高階の皆様がからむ陰謀のせい！ということで大騒ぎになったのです…」

そして伊周様、隆家様は遠い国に追放され高階の方々も疑惑を持たれた…しかし伊周様たちは一年で都へ戻されています…大輔殿…他言は無用ですが、実はこの度の出来事と長徳二年の事件とは良く似ています…」

「それは！」大輔は式部の眼を見たが、式部は小声で「いずれ…」と言ふなり、大輔に目配せをして首を左右に振った。

大輔は無言で式部に深々と頭を下げた。今の自分が、言わば式部の庇護化に居ることを幸いに思っている。姉の夫である藤原伊周が犯行に連座した疑いで官位を剥奪されたのだから、事件現場に勤務している大輔も言いがかりで逮捕される可能性が無くはない。

今回の事件で、道長はわざとらしく法律の専門家に罪の程度を答申させている。聞かれたほうは道長の意向に沿って「関係者全員死罪」という途方もない意見を出した。紙を埋めただけで死罪だと土木事業者が居なくなる。

無謀な答申を受けた道長は、見え見えのパフォーマンスで被疑者たちの絞首刑を減じ「官位の剥奪と官僚名簿からの除名」という裁定を下した。尤も庶民から搾取するしか能の無かった

当時の官僚が地位を奪われ庶民に落とされることは「死ね」と言われたようなものだった。

式部が大輔に「気の毒」と言った二人のうちで高階明順は、主犯とされた光子の兄であったが事件には無関係だったらしい。高階家の当主であるから、伊周の世話や定子皇后の葬儀、皇后の遺児の後見、そして皇后生母・貴子の葬儀などで「呪いごっこ」などをしていて暇はない。疲労から体調を崩していたところに、容疑者扱いの取り調べを受けたショックで死亡する。大輔の義兄である伊周や光孝源氏系の公家たちは数か月で元の官に復すことが出来たとされている。

雲隠れした主犯の高階光子らが遂に見つからなかったのは、寛弘六年の二月中に事件が解決したようで、道長は陰陽師を呼んで「怨霊退散」のお祓いをさせ、また今度は怪しくない坊さんを大勢集めて盛大に読経を行わせた。僧侶の読経中は誰もが神妙な顔をするのだが、今回の事件で完全に権力を手中にした道長は、どうしても笑いがこみ上げてくるのを我慢できない。長い日本仏教の歴史の中でも、お経を聞きながら嬉しそうにしていたのはこの男だけであつたらう。

「…それにしても、一の上様は御運の強いお方ですねえ…」

事件関係者の処罰が終り、心配した伊勢大輔への波及が無いことが分かって、ホッとした式部は二人きりのときに咳くように言った。

大輔は返事をためらっていたが心にかかることを隠して置けない様子で答えた。

「高階の皆様方はこれで終ってしまうのでし

ようか？明順様はご心労が激しいようですので心配になります…」

確かに高階家は続いて悲劇に見舞われたのが消滅することはなく中級官僚として生き延びた。そして程なく伊勢大輔は明順の子・成順（しげのぶ）の妻となるのだが…その結婚によりこの夫婦は石岡市と関わりを持つことになる。（別稿にて）式部は周囲に大輔以外の人影が無いことを確かめてから「…大輔殿、この前の話です」が、「と、十数年前に起きた或る事件を語り始めた。

「…大輔殿、表向き（政治）の世界は綺麗ごとだけでは済まないようですから…何も考えず何も言わないことが一番です…しかし黙っているにしても、何も知らないでいるか、承知しているかでは後々に大きな違いが出てきますから一応のことは申し上げておきます…」

「この世をば我が世とぞ思ふ…」と傲慢な歌を詠んだ藤原道長も最初から権力の座に居た訳ではない。それどころか、四男で長男の兄とは十四歳違いというから、普通ならば兄たちの後塵を拝してそこそこに過ごすところだった。

「普通では無い」ことで源氏物語のモデルにもなった冷泉天皇が二年で退位し、次に即位したのは弟の円融天皇（十一歳）である。この天皇の時代に道長の父（兼家）と伯父（兼道）が権力を巡る壮絶な兄弟の争いを展開していた。

その影響もあつて若い頃はバツとしなかった道長であるが伯父の死、父の死、長兄の早死に加えて、兄弟姉妹の中で道長を鼻唄にする姉が円融天皇の女御（第一側室・第三皇后）となり後の一条天皇を生んだことで道が開けた。激化

してきた藤原氏の他氏排斥運動も道長に利したようである。

紫式部の家系も、道長と同じく藤原北家の流れを汲んではいるが主流からは外れていた。祖父の代あたりから「受領（ずりよう）層」と呼ばれる諸国（中小）の国司クラスに格付けされており、父親は学書でもあった。式部も越前の国司として赴任した父親に従って、何年かを雪国で過ごしたこともあるらしい。

永観二年（984）八月、冷泉天皇の第一皇子である花山天皇が、円融天皇から讓位され七歳で即位した。円融天皇は未だ二十歳台で、退位が早すぎるのだが、この天皇の治世十五周年に御所の火災が三度もあり、妖怪の祟りと噂されたから責任と怖れとで辞めてしまったのである。

花山天皇も父親の影響で評判が良くなかった。幼い頃から偏執的な性格が見られたというので「怨霊に取り付かれている」などと言われている。父・為時は無役の公家から、この変な？天皇の蔵人（くろご）公設秘書を命じられていた。

蔵人は側近中の側近であるから、怨霊付きでも何でも、この天皇の治世が続けば出世コースに乗れる可能性が高い。ところが、この天皇は十七歳で即位し四十一歳で他界したのだが、その在位期間は僅か二年しかなかった。冗談で朕は仏門に入りたい」と言ったら道長の父親の藤原兼家ら親子によつて騙され、退位を強行されてしまった。

頭を剃られてから「剃り込み詐欺だ！」と気付き慌てて「出家中止！」と叫んだけれども、

毛の無い天皇はダメということで（タワシヤブラシではないから構わないと思うのだが…）藤原兼家の娘が生んだ懐仁（やすひと）親王（円融天皇の第一皇子）に皇位が移されることになった。

すぐさま七歳の懐仁親王が即位して第六十六代的一条天皇となり、徐々に藤原道長の時代が到来することになるのである。

そもそも花山天皇が「出家したい」などと思うようになったのは、寵愛していた女御が妊娠八か月で他界したことが原因とされている。多くの女性にチヨツカイを出していながら、偏執狂らしく一人の女性の死に執着し「うわべだけの無常観」を増幅させていたらしい。

この変な天皇が消えてくれれば、藤原兼家の時代が来る。一家総出の忠節を装って、「一緒に出家を致しましょう」と御寺へ強引に連れ込み、いざ髪を剃り落と段階になったら、花山天皇の周りには剃刀を構えた数人の坊主しか居なかつたというから、狸以上の騙し方である。

花山天皇は「花山院」として仏門に帰依し慎重に暮らさねばならなくなり、そのトバッチリで式部の父親は折角、乗りかけたエリートコースから蹴落とされた。多感な少女時代の式部は精神的に大きなショックを受けた。その頃、一歩間違えば紫式部が髪の毛を紫に染め、タバコを吹かしながら京都の繁華街をウロつくところだった。

平安時代ではそれも出来ないから、式部姐御は学問に打ち込み「源氏物語」が書かれるということになる。なお伊勢大輔はその頃に生まれた。

この悪質？な「剃り込み詐欺」事件が起きたのは寛和二年（986）六月二十三日のことと記録されている。式部の父親は失業保険を貰いながら次の仕事を待っていた。十年ほど経って、ようやく再就職の内示を貰ったのは長徳元年の暮の頃であった。職務は淡路の国司である。

本来なら仕事に贅沢は言っていられないのだが公家より学者に近い藤原為時はプライドが高く、花山天皇事件の被害者意識もある。十円も待つて六十余州の格付けで下位の淡路国（領地は淡路島だけ）というのが不満である。付言すれば常陸国は最上位で親王以外は国司になれなかつた。

学者の為時は、得意の漢詩に「人事の不満」をさり気なく詠み込み、知り合いの女官を通じて一条天皇に訴えた。まさか即位に至る裏事情花山天皇の退位にからむ詐欺事件）をネタにして天皇を脅迫したのでは無いと思うが：

心を痛めた一条天皇は、藤原道長に為時の任地を再考するように指示した。道長は苦々しく思いながらも、父親が首謀者で兄たちが加担し、少年時代の自分もアルバイトで事件に関与した覚えがあるから放つても置けず「淡路国司」の内定を変えて「越前国司」にした。越前（福井）は大國であるから為時も満足した。

ところが社会保険庁のようなミスは平成時代だけでは無かつたとみえて、既に「越前国司」の内示を貰っていた官僚が居り「突然の変更」に落胆し体調を崩してしまった。役所は「ねんきん特別便」を真似て「にんち特別便」を送り、越前国と同格の国の国司にしたのだが、病気が治らず遂にこの官僚は死亡してしまった。

感性の強い式部は、そのことを知って心に深い傷を受けたと推測される。式部が同族で顔見知りの藤原宣孝から度重なる結婚の申し込みを受けながらも頑なに断り続けていたのは、その所為では無かつたらうか：

母系社会の時代に、幼くして実母に死別し十四歳で姉をも失った利発な少女は、持つて生まれたその才能ゆえに父親から英才教育を施され、そして政治の裏側を垣間見ることも多かつた。庶民には高根の花の世界に生きて、源氏物語で艶麗壮大な人間模様を描きながら紫式部の心には、大きく閉ざされた部分があつたのでは：

長徳二年（996）の正月、紫式部は二十四歳になった。越前国司の父親は雪解けを待つて任地に赴くので式部も同行することになっており一家は支度に追われていた。「源氏物語」は未だ紙の準備さえ出来ていなかった。

十年前に、まさか天皇を騙す公家がいるとは思わず、迂闊にも皇位を失つた花山天皇は「法皇」として当代の帝を支える立場に置かれたけれども中身は二十歳代最後の偏執狂青年である。初めのうちこそ神妙にしていたが、何時までジツとして居られる訳が無い。

十年前に、早死にされて出家を思い立つほどのご執心だつた女性には、道長の叔父・藤原為光の次女であつた。為光は道長の父とは十歳下の異母弟であり存在が地味で、道長が権力を握る前に太政大臣に任命されるとビックリして翌年には娘四人と息子らを残し他界してしまつた。

そのような人物であるから、花山帝退位事件には一切、関わっていないかつた。この陰謀は計画から実行まで藤原兼家とその息子たちが仕出

かしたものであるが、一番に活躍したのは（活躍と言えるかどうか疑問はあるが）三男の道兼であった。「振り込め詐欺」ならば被害者を銀行へ行かせる大役である。

了見違いで自分が一番の功労者だと思いついでいるから、長男の道隆を差し置いて藤原北家を相続する気だった。それなのに父親は道隆を後継者にして死んでしまったから、兄の一家が憎くて仕方がない。事ごとに反発していた。

紫式部の父親に就職の話が持ち込まれた頃には一条帝皇后・定子の父親であり、道長には長兄に当たる藤原道隆が四十三歳で死亡した。この人は豪放磊落（ごうほうらいらく）酒好きで豪傑肌の人物だったようで死因は糖尿病と推察されている。

要職に居たため後継人事が問題になる。世襲の時代であるから高階貴子との間に生まれた嫡男・伊周の任命が内定していたのだが、道兼はこの時とばかり裏で天皇に自分を売り込んだ。一条天皇にすれば不気味な目で見ている「闇の功労者」を粗末に出来ず、さりとて藤原惣領家の相続体系を乱す訳にもゆかず悩んでいた。

当時の天皇は政治の中核であり、国民のことを考えたら個人の家の相続争いに関わっている暇は無いのだが、藤原氏が勝手に要職を抑えているから始末が悪い。天皇でも動きが取れない。

どういう理由か、人事が発表されたのは道隆の葬儀の日であった。会堂で神妙に焼香をしていた喪主の伊周には、弔電の代わりに死亡通知よりも悲しい人事の情報が齎された。確実だった筈の頭職「関白」の椅子は叔父の道兼に渡り、便乗値上げのように道長も美味しいポストを貰

い、北家惣領の藤原伊周は一つ格下の大臣にされていた。

この人事には天皇の生母である詮子（せんし）の思惑がからんでいたと言われる。少年天皇の為には、甥の伊周よりも兄弟（道兼・道長）の方が役に立つと判断して公家人事に口出しをしたようである。しかし念願が叶った道兼は喜ぶ暇も無く急死してしまった。不似合いな地位は死を呼ぶ。

得をしたのは、紫式部が「ご運の強いお方」と言った道長であり、その地位が惣領家を凌ぐことになる。伊勢大輔の姉が嫁いだ伊周は、世襲で与えられる筈の地位を失い、悶々の日々を送ることになったのだが、いつの頃からか為光の三女を複数の妻の一人に予定していた。

一方、元氣を取り戻した花山法皇は、出家する原因になった為光の次女を思い出して、或る日、仏壇に線香を上げようと屋敷を訪れた。そこで故人に面影が良く似た四女を見つけたのである。

当時における公家社会などの結婚形態は、男性が複数の女性の許に通うものだから、此の仮ならば特に問題は無かった筈なのだが、ここで一つのトラブルが発生した。紫式部と伊勢大輔が口にしていた「或る事件」がそれである。

仏門に帰依して「法皇」になったとはいっても花山法皇自体が変わる訳ではなく、道梁息子が頭を丸めただけだから、持つて生まれた偏執狂は治らない。亡き次女の代わりに見つけた四女を溺愛して頻繁に通い始めた。

それとは知らず、ある夜に三女の許に通ってきた伊周は帰りがけに美人四姉妹屋敷の中で夜

這いに来た花山法皇の姿を見た。法王は四女が、伊周は三女が相手だから昔の遊郭のように、お互いが知らぬ振りをすれば良かったのだが、番号札を付けていかなかったから相手が分からない。自分が通う「三番さん」のところへ法皇が来たと勘違いした伊周は憤慨した。しかし相手が法皇であるから喧嘩するわけにもいかず、番号を聞く訳にもいかず、困って弟の隆家に相談した。

相談を受けた隆家は、未だ年若ながら父親譲りの豪傑で兄思いの熱血漢であった。二十年程後に九州太宰府の副長官となるのだが、在任中に朝鮮系の海賊が押し寄せる大事に遭遇し、公家ながら武士を凌ぐ活躍で武勇伝を残したほどの人物であるから行動は大胆不敵、大雑把である。

「法皇のくせに、女の許に通うとは実にケシカラン！よし、兄貴、おれに任せろ…」力を持って余していたから二つ返事で引き受けた。

少し話の筋が逸れるが、常陸国に興った平国香を祖先とする桓武平氏は、十二世紀の半ば頃から同じように台頭してきた清和源氏を「保元・平治の乱」で蹴落とし、藤原氏に替わって天下を手中にする。源氏頭領の源義朝は討たれ、少年の頼朝も捕えられて斬られる運命にあった。

それを哀れんで平清盛に命乞いをし、頼朝を助けたのは清盛の継母・池禅尼である。二十年の後に頼朝は伊豆に兵を挙げ、やがて平家を滅ぼすことになる。その歴史を作った池禅尼は豪傑の藤原隆家から六代目である。また平治の乱を惹き起こした藤原信頼も隆家の子孫である。この家系は妙な部分で日本の歴史に深く関わっ

た。

長徳二年の正月に舞台を戻して、一月十六日の深夜：源氏物語を書き始めるまでに未だ七年もあるから、主婦代わりで家事に忙しい紫式部は疲れて眠る時間である：に事件は起きた。

「花山法皇に自分の彼女を横取りされた」と勘違いをした藤原伊周が弟の隆家に相談をした結果なのだが、面倒なことの嫌いな隆家が花山法皇を驚かして追い払う方法を実行したのである。

逢瀬の帰りに、貴方が噛んだ小指が痛い！脳天気な花山法皇は軽い鼻歌でナツメ口を奏しながら美人屋敷を出ようとしたり。さすが法皇で女性との密会でも何人かの供が付いている。

その時に、花山法皇に向かって一筋の矢が飛び来たり衣の袖を射抜いた。余程の弓の名手が射たとみえて矢先は微かに血の滲む傷を残していた。法皇が肝を冷やしたことは言うまでも無く、慌てふためいて自分の屋敷へ逃げ帰った。

シヨックは受けたが、さすがに花山法皇は事件を伏せていた。たとえ騙されたにしても、本来は仏門に入った身で「逢引」に行つた帰りに射られたなどと自慢できる話ではない。伊周・隆家兄弟も見当違いの武勇伝を他人には言えないから双方秘密にしていたのだが、当時のマスコミは妖怪やら怨霊のネタばかりでスキャンダラスで艶っぽい話題に欠けていた。漏れた噂が都中に広まった。

これに目をつけたのは道長である。兄の一家を越えることに成功し、最終目標の摂政関白太政大臣を狙ったのだが、それとなく道長の野望を察知した一条天皇が許さなかった。辛うじて

摂政関白に準ずるような「内覧」という官旨を得た。地位は左大臣止まりである。惣領家の巻き返して関白を奪われる恐れもある。

さらに一条天皇には小姑のような存在で冷泉上皇と花山法皇がいる。道長は、何かの時に敵に回られると面倒なので、今回の騒ぎを「花山法皇に対する藤原伊周・隆家兄弟の不敬事件」として取り上げることにした。

早速、事件を公表し伊周兄弟の逮捕状を請求する段になって、一条天皇から「懐妊に伴い定子皇后が藤原伊周の屋敷へ宿下がりをする」と言われたから、さすがの道長も、その時は事件を有耶無耶にせざるを得なかった。

ところが三月の下旬に東三条院こと道長の姉である天皇生母の藤原詮子が病気に罹った。やがて回復し数年は生きたらしいから難病であるうけれども当時の治療は、ある程度の漢方薬に頼るほか専属陰陽師の占いか僧侶のご祈祷しかない。

十数年後に紫式部が道長から見せられた「呪いのお札」がこの時も使われ、屋敷の搜索で縁の下から怪しいお札が出てきたのである。

「犯人は誰だ！」と騒ぎ出す前に、実にタイミング良く近くのお寺の坊さんが神妙な顔で出てきてきて重大な告白を簡単にした。

「…実は、内大臣（伊周）からご依頼を受けて真言の修法を行いました。ご免なさい…」

この密教修法というのは天皇しか行えないというもので「四民平等」を原点にする仏教には特権階層だけの密教など有り得ないのだが弘法大師が高野山にそのための道場を開いてしまった。馬鹿馬鹿しいけれども「密教の修法」を勝

手にしたことが重大な罪になった。

四月二十四日には宮中で秘密会が開かれて道長自身の主導により「中関白家」と呼ばれた長兄の一族に対する処分が決定されたのである。その罪とは「花山法皇に対する不敬」「禁じられた修法の実施」「東三条院呪詛」の三力条であった。

京都の二条辺りにあつた伊周の屋敷には検非違使が向かつたのだが、折しも天皇の子を懐妊した皇后が出産のために来ているというので、逮捕状があつても踏み込む勇気がない。中途半端なデモ隊のように逮捕状をヒラヒラさせながら屋敷の周りをウロウロして何日かが過ぎた。

その隙に藤原伊周の母親である女丈夫の高階貴子が伊周を連れて屋敷を抜け出し、北野天満宮に隠れてしまった。祭神の菅原道真公は権力を振り回す奴が嫌いだから、伊周の失態を苦々しく思いながらも、道長に追われる母子を匿ってくれたから二人は髪を下ろし仮の出家姿になった。形だけでも俗界を離れた者には、扱いは変えないと罰が当たりそうに相手が怯むと考えたのである。

一週間ほど経って、やっと覚悟を決めた検非違使が屋敷内に踏み込んだところ、弟の隆家や高階家の者は居たが肝心の伊周が居ない。屋敷中を探しているところへ高級車（と言っても動力は牛）が入ってきて怪しげな坊さんと尼さんが下りた。これを見た皇后も髪を切り尼僧姿になった。

結局、内大臣の藤原伊周と弟で中納言の藤原隆家は西国へ飛ばされたのだが、さすがに地方では高官として丁重に処遇されたようである。

翌年の四月には一人とも許されて都へ戻った。

問題は残された家族で、高階貴子は心労が高じて急死したが、喪主がいない状態であった。

兄の明順が辛うじて罪を免れたから、高階の屋敷で葬儀を済ませた。その混乱で藤原伊周の屋敷は何者かに放火され全焼してしまった。十二月には定子皇后が産み月を迎えるのだが屋敷が無い。高階の家は葬儀で穢したから使えない。

婚姻が女系制であり、出産準備は生家の責任になる。当主の罪が確定したために、真に奇妙なことには「当代の皇后が現在の天皇の子を産むのに屋敷が無い」という事態が生じた。

さらに権力を握る藤原道長が自分の娘の中宮にかまけているから他の公家たちもこれを憚って口も手も出せない。事情を聞かされない一条天皇は公家たちが皇后の出産準備をしてくれているものとはかり思っている。

さすがに東三条院がこの状況を見かねて「どこかに屋敷は無いか？」と探してくれていた時に、不動産屋を介さずに「…どうか、私の屋敷を…」と言ってくれた人物がいたから、定子皇后は出産に備えることが出来たのである。その人物とは？

桓武平氏として知られるのは石岡ゆかりの平国香の子孫たちである。寛平元年（889）五月十三日、桓武天皇の曾孫である高望王（たかもちのおおきみ 国香の父）が平の姓を貰って臣籍に降下した。これが「平姓の始め」とされている。

ところが葛原親王の長男で、大納言になった高棟王（たかむねのおおきみ）という人が居て貞観（じょうかん）九年（867）に死亡して

いる。平姓を貰ったことになっているから、こちらの方が早い。それはどうでも、この系統は桓武平氏高棟流として都に存在し、藤原氏全盛時代にも中級官僚の地位を保っていた。後に平清盛夫人として安徳天皇を抱き、壇ノ浦に沈んだ平時子は、その高棟流平氏の直系である。

高棟王の子は平維範と言った。菅原道真を苛めた藤原時平が、その祟り？かどうか三十代で死亡した延喜（えんぎ）九年（909）四月二十二日に中納言のまま右近衛の大将を兼ねた。源氏物語にもしばしば登場する晴れの職務である。

維範の孫に珍材（はるき・よしき）と呼ぶ珍しい名の人物が居り、その子の生昌（なりまさ）は国司級の官僚だったと思われる。定子皇后の苦境に際して藤原道長の威光を恐れず何かと助けたのが平珍材の子供たち（生昌・惟仲兄弟）らしい。なお珍材の甥で本流の平親信には娘が二人居り、一人が高階家に嫁して生まれた子が、紫式部の遺児・賢子の夫となる高階成章であるとされる。

定子皇后は兄の事件で髪を切ったが、一条天皇の強い命令で後宮に戻った。そして道長の威を借りた連中の侮りを受けつつも耐えて、脩子（しゅうし）内親王、敦康親王に次ぐ第三子出産で僅か二十五歳の生涯を終えたのである。定子皇后とは対称的に常に日の当る場所にいたのが十一歳で一条天皇の後宮に入った彰子中宮である。

「…その頃、私は越前の国に居りましたから、詳しくは分かりませんが、大方はこのようなことであったでしょう…」

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけはいけません。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。

また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

（石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可）

石岡市石岡2158 6

電話0299-24-3881

紫式部は自分の過去を振り返るように十数年間の出来事を伊勢大輔に語って聞かせた。長徳四年から翌年頃に結婚した式部は、定子皇后が亡くなった翌年に夫を失っている。一人娘の賢子は一歳であり父の顔を覚えてはいない式部が源氏物語を書き始めたのは、その頃であり後宮への出仕は、さらに数年後と推定されている。

劇団ことば座・夢倶楽部

(第五号)

十月十七日、ことば座は満一歳を迎えた。

ことば座を正式に発足させてすぐに発表の基地となる劇場探しを始めたのであった。

座長である小林幸枝の希望で、発表していく作品の方向を「常世の国の恋物語」と決め、石岡市、そして霞ヶ浦を中心とした常陸国の風景や歴史・文化をモチーフに百の恋物語を創作し、朗読舞に表現することとした。

朗読舞は、朗読にのって手話を基軸とした舞いで表現するという世界初の演劇表現であり、この舞演技をできる俳優は、現在のところ小林幸枝の一人であることから、大がかりな舞台よりはライブハウスの舞台があればと思っていたのであるが、そのような劇場をこの地元で探すことはまず不可能であろうと思っていた。

そんな中、ダメもとを覚悟でギター文化館へ下見に出かけたのであった。ところが、これはイケル！と演出家としての目にギター文化館のホールは飛び込んだ。

この田舎にと言ったら失礼であるが、この何もない田舎に、こんな洒落た、しかも素晴らしい音響をもったホールがあるとは、夢にも思っていなかった。

特に、ギター演奏を主目的として造られたホール空間は、演劇舞台にはない、また考えられない魅力あるものであった。特に、既成を突き破った演劇スタイルの朗読舞には願ってもないものであ

そして、これもまた「ダメもと」で木下明男代表に、ことば座の発信基地としての話を持ちかけたところ、即断にOKをもらうことができたのである。

朗読舞を音楽家をはじめいろいろなアーティストたちとコラボレーションしながら広めていきたいと考えていた中で、ギター文化館との出会いは、ことば座の将来に大きな夢と希望を与えてくれた。昨年の十月から、オカリナ奏者の野口喜弘氏の協力をもらい、最近では一回に二回の割で一緒に舞台作りをさせてもらっている。これも、ギター文化館というホールであったことによる、お付き合いの始まりであつたらうと思つた。

その意味で、朗読舞のことば座は、ギター文化館との出会いに始まり、言い言いから、よちよち歩きにまで成長してきたといえる。特に、豊饒者である女優小林幸枝にとつては、明確な音の認識が取れないのではあるが、このギター文化館にあつては、母親の胎内にいるかのような、優しい音の波動を体感できる空間であるといえる。

最初の出会いから、違和感なく野口喜弘氏のオカリナの優しい波動を感じ取ることができたのも、ギター文化館という丸い木のほらであったからだろうと思つている。

その夢を紡ぎだす空間であるギター文化館にまつわるお話を、木下代表から、数回にわたつてつ

かづってきたのであつたが、今回は、木下代表のお話ではなく、この地にギター文化館の建たなければならなかつた天の必然性に似た事実について紹介したい。

このギター文化館の建つ土地は、木下代表の義母である杉山ハツさんのご主人の所有するものであつたのだそうだ。そのハツさんが、ギター文化館の建設計画もない一九八五年に、この丘の上の畑に将来の思いを映し描いて作文を書いたことがあつた。何気なく思いを書いた作文だったので、ちゃんと保存するつもりもなく忘れ去られていたのであつたが、最近になって、物入れの底から出てきて、それを読んで木下氏も驚いたのだといふ。

その作文は、今ではギター文化館に額に入れて保管されているが、わがことば座においても、この杉山ハツさんの作文に書かれた思いを見るに、ここを発信基地として決定しなければならぬ必然性のような因縁を感じるものである。

× × ×

『八郷町は広い土地に緑も多い。筑波、足尾、加波山、吾国山等山も多い。この環境を生かし都会の人にもこのやすらぎの里を分けてやりたい。ふれあいの里を作りたい。私は暖め続けた夢はけつして氷らせない。これこそ私の理想郷なのである。私の家の畑は皆立の上にある。今日も一休みしながら見たす山々の何と美しい事か。そして私は目をつむる。そこには映像の様につきつきとふれあいの里が目につつる。白い明るい建物、ヨーロッパの宮殿のようだ。広い庭。林に少し手を加えて散歩道を作つた山が後ろにある。池あり橋あり、四季の移り変わりと共にばらも、つつじも、紫陽花も植えてある。散歩につかれれば休める東

屋もある。わり屋根でここで日本風だ。

ふれあいの部屋では都会の人と八郷の人が談笑している。お互いの会のことを話し合っているの
であろう。他地区のよき所を教えて頂いている
人々の明るい顔だろうか。

窓から絵をかいている人もいる。竹細工、お手
玉作りを都会の子供に教えている人もいる。

図書室も音楽室もある。奏笛とハーモニカの
合奏も見事だ。風呂は眺めのいい屋上にある。
頭の上を湯の音が快い。その湯の音で私はつづ
っていた目をあげた。

日に七度色を変わらせて私を楽しませてくれ
た筑波山が空の赤さにそまっていた。今落ちて
ゆく太陽もこんなに美しい夕映えを残してこれ
るのだ。私は夢を文に書くしか出来ない。けれ
共、文化的な生活を営み、文化を高める夢はず
てない。

希望とやすらぎの里のこんな施設を私はほし
い。幸いなことに八郷町では第三次総合計画と
して希望とやすらぎの里やさとピアを構想中で
す。二十一世紀の夜明けまで後十五年、私はそ
の日まで生きて生きてすばらしいこんな文化の
交流の場をこの目でみたい』(杉山ハツ)

杉山ハツさんがこの作文を書かれたのは二十三
年前のことである。ギター文化館が今年十五周年
であるから、作文を書かれた頃には未だギター文
化館の計画すらなかったときであった。

人が何かを望み、それを真剣に望み、思いを確
りと紡いで行けば、夢は必ず実を結ぶという見本
のような話である。

杉山ハツさんが、文化の思いがなかったら、こ

の丘にギター文化館が実現することはなかっただ
ろうと思う。そして、わがことは座も此処に産声
をあげ、新しい表現文化の双葉を芽吹くこともな
かったであろうと思う。

ことは座が満一歳を迎え、這い這い、よちよち
歩きからおませな口をきくようにまで、育ってき
た。杉山ハツさんの作文を、原文のままに紹介し
たが、心の表現は技術ではなく、思いの強さであ
ることを知らされる。

今年も残すところ、十一月の公演だけとなった。
悔いのない舞台で、良い年を迎えたい。すでに来
年のギター文化館での公演日程が、決まった。

ギター文化館発：ことば座第 11 回定期公演

新鈴が池物語 (2008)

12月21日(日曜日)開演午後2時

未来への警鐘として鳴らされた「ふるさと物語」
としての伝説の火を消してはならん!!

小林幸枝の十八番物「新鈴が池物語」が剣豪池田忠男
(夢想神伝流：2004年度日本一)を連れて今年も帰って
くる。野口喜弘の奏でる大地の声オカリナに乗って、
小林幸枝が希望の鈴姫を朗読に舞い、池田忠男が不毛
な怨嗟の終焉を演武に介錯する。

第一部：朗読舞劇「新鈴が池物語」(2008)

第二部：野口喜弘オカリナ・コンサート

前売りチケット(2500円)は、ギター文化館(0299-46-2457)

いしおか補聴器(0299-24-3881)にて取り扱っております。

ことば座 茨城県石岡市府中5-1-35

電話 0299-24-2063 fax0299-23-0150

第十定期公演

新説「悪路王」(悪路狼夢の夢)を終えて

新しい挑戦

小林幸枝

十月十九日の第十回公演は、私にとつて忘れられない、記念すべき公演となった。鹿島市の鹿島神宮、桂村の鹿島神社に祭られてある悪路王の頭部の木彫をモチーフに、書き下ろした恋物語で、変化に富んだ五つの舞が入った朗読舞劇でした。

バック音楽は矢野恵子さんが担当して下さり、楽しく、気持ちよく舞うことができた。

舞は民の暮らしの喜びと感謝を表した「風の姿」、悪路狼夢こと悪路王が恋人を殺された悲しみを舞う「怒りの涙」、悪路狼夢の復讐の「剣の舞」、乙音が夢の枕に舞う「鬼畜武士の哀れ」、道子が舞う「紡ぎの舞」の五つでしたが、それぞれのテーマに即し、ゆったりスケール感を持った舞いに、怒りと悲しみを表した舞いに、剣をもった戦いの舞、女の嘆きの舞、愛の紡ぎの舞とそれぞれ心を示す表情を作りながら、舞をつくっていった。

今回は、響者の友達が大勢来てくれ、バレーボールの私しか知らない人たちは大変びっくりしていました。

県外から来てくれた友人で、手話劇や手話パフォーマンスなどの聾啞者の劇団の公演をよく見に行く人がいて、私の舞を見てこんなに素晴らしい舞いは見たことがないと言って、絶賛してくれました。幸枝さんがプロの女優さん？

と不思議がっていた人たちもビックリで、素晴らしいと言ってくれました。

万葉集などを手話で舞えることを知らなかったみんなは、自分達の言葉である手話の新しい面を知らされて大感激していました。

ジェンベやドラム、お箏を演奏してくれた矢野恵子さんとは、しっかりと心を通わせられるとても大切な仲間で、今回は特に一体感が大きく作れ、これが表現という舞台をつくるということなんだなと自覚することができました。

ご主人のオカリナ奏者である野口さんも私が初めて出会い、知った音楽家の人で、嬉しい大先輩です。これからずーっと長く一緒に舞台を作って行けたら、と思っています。

素晴らしい仲間が一人出来ると、人生って不思議なもので、次々と素晴らしい人たちとの交流が生まれてくるようです。十二月の公演では、私が初めて舞台上に立った演目である、石岡府中城跡に纏わる伝説話をもとにして創られた「新鈴が池物語」を、居合で日本一なられた、石岡の剣豪、池田忠男さんの演武とコラボレーションすることになりました。

野口さんの奏でる大地の音色、オカリナに合わせ、私の舞と池田さんの真剣の演武がどのようにつながり、ふるさとを表現するのが、楽しみなのと、緊張で心が震えます。

舞台演出も、だんだんと難しく言われるだろうと思いますが、これからも頑張って自分たちの古里を手話の舞に表現していきたいと思っています。よろしく応援して下さい。

「悪路狼夢の歌」の公演を終えて 矢野恵子

十月十九日、第十回ことは座定期公演が無事終わった。前回、小林さんとジェンベ(西アフリカの太鼓)で共演したことが、新しい自分を見つけるきっかけとなった。今回も自分の力を高め、試したいという願いもあつて参加させていただいた。

今回の台本には舞歌が五つもあり、ジェンベだけでなくハンド・ドラム(アメリカ)、文化箏(普通の二分の一の大きさ)、口琴(インドネシア)の楽器などを取り入れてみることにした。

台本をもらった時、悪路狼夢の歌という題名から、猛々しく恐ろしい感じがし、激しいリズムが多いのかなと思ってしまったのであったが、風や女性の心を表現した舞歌もあり、静と動が交差する恋物語であった。

楽器の特性や舞、朗読とのイメージをぶつけ合いながら、私の心に棲んでいる願いの思いを編みこんでいくように、音を作り出していった。稽古の度、白井さんや小林さんに意見を頂き、自分の本心に納得できる音作りを楽しむことができた。

今回の稽古が始まる頃から、小林さんは、小林さんの聴覚特性をチェックし、音のある程度聞き分けられるように調整された新しい補聴器を使い始め、これまでとは少し違って音を耳と体で受け止めるようになりました。

小林さんが役に入り込み、時に力強く、時に女性らしくしなやかな動きを見せて舞う舞に呼応し、私の鳴らす楽器も一緒に舞うよつな音が作れると、それを体を感じ、耳に聞き取ると小

林さんの舞動作はさらに大きくなっていった。そのことに感動し、私の打ち鳴らすジエンベ、ハンド・ドラムもより感情が高まってくる。

そんな私を見て小林さんは叩きすぎて手が痛くないか、と気遣ってくれた。そんな優しさに触れると、さらに一層、打ち鳴らす音が舞に呼応した。

本番では、舞歌 怒りの涙、舞歌 剣の舞が終わったとき、いわき市から来られた饗唾者の方々から、拍手を頂いた。小林さんの舞への拍手ではあるが、私への拍手でもあることが十分に理解でき、とても嬉しい気持ちになった。

終了後、観客の方から、「このハンド・ドラムは、バチで叩く音と、手で叩く音とはずいぶん違うんですね」「箏の音は優しくとてもいい音色でしたよ」と話しかけられ、ギター文化館の響きがいかに素晴らしいか、私も音を出していても気持ちよかったです。

言つまでもないことだが、この公演が本番を迎えられるのは、多くの方々の手によって支えられてのことである。そのことが今回はより強く感じられた。舞台の道具を担当して下さっている小林さんのお父さん。お父さんは写真の撮影もされている。

舞台装飾は兼平ちえこさん。そして今回からは、兼平さんのご主人が照明を担当された。毎回色々な方が手伝いに参加されている。風の会の打田さん。いしおか補聴器の阿部さん。自給農園をされている松山有里さん。それから忘れてはいけなのが、小林さんのお母さん。今回は手作りのお稲荷さん。慌ただしく食べる昼食に、手掴みで食べられる稲荷寿司はとっても嬉

しいし、疲れる体に甘い油揚げは実に嬉しい。公演に参加するたびに人の輪が広がってきている。

今回「悪路狼夢の歌」公演に参加するに当たり、桂村高久の鹿島神社、鹿島市の鹿島神宮を訪ね悪路王の木象を見たり、友人に悪路王に関する書籍を借りたり、また友人の恩師からも鹿島信仰」という特別展の資料をお借りするなどして、歴史的背景を調べながらイメージ作りをすることができ、とても楽しかった。

今まで、あまり歴史に興味、関心がなかったのであるが、この公演を通して、多くの人に出会い、歴史を学ぶ楽しさを知ることができた。同時に演じる喜びを今まで以上に感じることもできた。こうした体験は今後の演奏活動に、新しい風を吹き込んでくれるだろうと思う。

Coffee & Tea Room

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・蕎麦会席料理のお店です

(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30 ~ 15:00

16:00 ~ 18:00

月・木曜日が定休日です。

電話 0299 43 6888

ギター文化館

2008 CONCERT SERIES

The 15th anniversary

12月 7日 マリア・エステル・グスマン ギターリサイタル

12月14日 ロス・トレス・アミーゴス フォルクローレコンサート

ギター文化館

〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

0299 - 46 - 2457

Fax 0299 - 46 - 2628

小林幸枝が、初めて舞台上に立ち物語を手話に演じたのが「新鈴が池物語」であった。以来何度となくこの物語を演じてきた。ことば座を設立し、公演活動を始めた昨年も二回の公演をもつた。勿論その都度演出を変えて、演じてきた。

小林にも、私にもいろいろな意味でこの物語には特別な思いを持っている。

この新鈴が池物語は、石岡の高校生が、夏休みに文化展を行った際に、夏の夜の怪談話を何かしてくれませんかという話に応じて、書いてあげたものであった。

石岡生まれ、石岡育ちの高校生が多数いたが、この伝説物語を知る人はいなかった。

平国香を祖とし、連綿二四代にわたって続いた大塚氏であったが、戦国の世、浄幹の代に入つて、驕りと智謀の拙さで、佐竹義宣によって滅ぼされてしまった。落城の際に、智謀拙き城主が、妻鈴姫を逆恨みして、片目を刺すと自ら城に火を放ち果てたという。この時、片目を殺された鈴姫は、燃えさかる火の中を身もだえしながら、深い恨みを抱いて、城中の池に飛び込み命を絶った。その後しばらくして、この池に住む魚は皆片目であったと、伝えられている。この「鈴が池物語」は、今では忘れ去られてしまっている石岡に伝えられてきた伝説物語としての事実である。

伝説にある物語が事実と違うことではない。しかし、左近太夫浄幹の智謀の拙さで滅びたこと、そしてその原因は浄幹及びその取り巻き達が、先代達が築いてきたものに胡座をかいて将

来のことを考えようとしなかったによるのは事実である。

この事実を基にして後の世の人たちが、一つの成功に胡座をかいていたのでは滅亡するぞ、という教訓として哀しい恨み物語に創作して伝え残したのであろう。

このように伝え残された物語が、忘れ去られようとしている現在の石岡の衰退は目を覆いたくなるような有様である。これは、今の石岡の人たちが、こうした伝説物語に、現代に即した伝承を創作してこなかった怠慢のつげだということが出来る。

新鈴が池物語は、こうした歴史の事実を踏まえて、今日必要とされている伝承を裏物語の手法を用いて創作したものである。創作された物語そのものは、男女の愛情の一つのあり方を講談調に表現しているのであるが、そこには人の暮らしの真実のあり方を述べたつもりである。

この物語が石岡生まれである小林幸枝の俳優としての出発点になったことは、ある意味縁めいたものを感じる。また、小林幸枝にとつても、自らの一八番物として位置付けていることは、さらに因縁の深さを思わせる。

この「新鈴が池物語」では、男女の愛の形を表現しているのであるが、異様とも思える一つの愛の形の中に、ふるさとに生きること、暮らしを創ることの何たるかを考えてみる、きつかけを与えたつもりである。

二〇〇八年も残り少なくなってきた。その最後の公演に、この物語を取り上げることで、今年も終えられる、といった気持ちになつてくる。

新鈴が池物語二〇〇八は、石岡の剣豪、居合

道日本一となった池田忠男さんを招いて、野口喜弘さんのオカリナをバックに、鈴姫の恋舞と剣の演武の共演で、ふるさとへの希望を表現していきたいと思つている。

ギター文化館での満二年の卒業公演に、新たな応援と共演者を迎えることができたことは、大いに希望の膨らみ、明日への夢の広がることである。

古里とは、十世代にわたって口に伝えられる物語のある里のことをいう、と言っている人がいるが、「古」という漢字は、十の口と書く。こじ付け論ではあるが、何となく納得のいく話ではある。

歴史の里とは自称しながら、何もかも踏みつけて捨ててしまう現実をみると、十世に継がれて、ふるさとと大声に叫ぶしかないであろう。しかし、胡散臭く見られながらも、大声に叫んでいると、真面目な協力者、共演者がポツリポツリと手を挙げてくれるのが、実に嬉しいことである。

悪路狼夢の舞に新しい飛躍を見せた、小林幸枝の舞技に大いに期待を思ふ晩秋の深夜である。

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)